

# 寺院資料調査と文学研究

渡 辺 匡 一

## 一 問題の所在

二〇〇五年、中世文学会五十周年記念大会シンポジウムの第一部会「中世文学と資料学」において、資料調査と文学研究の関わりについて討議されてから、十年余の月日が経った<sup>(1)</sup>。

稿者もパネラーの一人として地域の寺院資料調査・研究の一端を報告したが<sup>(2)</sup>、当時関わっていたいくつかの調査も終わりに近づいている。本稿では、これまでの調査の経験を踏まえ、改めて、寺院資料調査と文学研究の関わりについて考えてみたいと思う。

## 二 寺院調査の概要

本稿で対象とする四箇寺の調査について概観しておくことにしよう。四箇寺は、「寺院」という環境は共通するが、それぞれの役割や寺勢の推移によって蔵書形成に差異が生じていったようである。

一箇寺目は、善通寺（香川県善通寺市）の調査である（一九八九―二〇一三）。真言宗善通寺派の本山、善通寺の調査は、国文学研究資料館による悉皆調査であり、典籍数は一万点に及ぶことが明らかとなった。永禄の大火で灰燼に帰した後、歴代住持の書写活動などによって収集された典籍と、明治時代、廃仏毀釈によって流出した周辺寺院の典籍で蔵書形成されており、真言宗諸流派の

行法書を中心に、仏書が圧倒的な分量を占める。<sup>3)</sup>ただし、総数が多いために割合としては低くなるものの、漢籍などの典籍も確認することができる。

二箇寺目は、宝聚院（福島県いわき市）の調査である（一九九九—二〇一七）。新義真言宗智山派の灌頂道場であり、棚倉藩の祈禱寺院でもあった宝聚院の典籍数は、悉皆調査により千三百点に及ぶことが明らかとなった。灌頂道場であるゆえか、室町時代後期～江戸時代にかけての加行・行法関係の仏書を中心に蔵書形成されているが、漢籍や僧侶の印信・行法書（私物）の他、昭和に至るまでの典籍も確認することができる。<sup>4)</sup>

三箇寺目は、佛法紹隆寺（長野県諏訪市）の調査である（二〇〇三—）。宝聚院と同じく新義真言宗豊山派（後に智山派）の灌頂道場であり、高島藩の祈禱寺院であった佛法紹隆寺の典籍数は、悉皆調査により二千五百点に及ぶことが明らかとなっている。<sup>5)</sup>やはり宝聚院と同じく室町時代後期～江戸時代にかけての加行・行法関係の仏書を中心に形成されており、漢籍や僧侶の印信・行法書（私物）の他、昭和に至るまでの典籍も相当数に及ぶことが確認できる。

四箇寺目は、如来寺（福島県いわき市）の調査である

（一九九九—二〇一六）。室町時代後期まで浄土宗名越派の本山であった如来寺の典籍数は、悉皆調査により千四百点に及ぶことが明らかとなった。本山・檀林としての役割を担った室町時代～江戸時代初期の典籍（二〇〇点）と、江戸時代末期～大正時代の住職であった鈴木知周（良住堅東）の個人蔵書（一二〇〇点）で形成されており、仏書に加え、漢籍、農業、暦、教科書など、多岐にわたる典籍を確認することができる。

興味深いのは、宝聚院と佛法紹隆寺の蔵書形成が、同じように推移していることである。ともに、真言宗の僧侶を育成する灌頂道場であり、江戸時代は藩の祈禱寺院という役割を担う両寺は、明治時代以降も非常に似通った蔵書形成を行っている。地域を超えて、「僧侶育成機関の蔵書形成」のモデルになり得る可能性を見出せるだろう。同じ真言宗寺院である善通寺にも、両寺と同様の典籍（漢籍など）を確認することができ、「育成機関」としての機能を見出せるが、一方で、真言諸流派の行法書を収集し、空海の誕生所、真言宗の総本山としての役割を担おうとするところにも特徴を見出せる。<sup>6)</sup>

また、宗派は違うが、如来寺においても、学問所である檀林の機能を有していた江戸時代初期までは、宗派の

重書や師資相伝の典籍などから、他の三箇寺と同様に「僧侶育成機関の蔵書形成」が図られていたことが確認できる。しかし、如来寺の蔵書でもっとも注目すべきは、鈴木知周（良住堅東）の蔵書だろう。この蔵書は、浄土宗の僧侶、良住堅東として学問研鑽に勤しんだ江戸時代の蔵書（仏書、漢籍など）と、明治元年に鈴木知周と改名し、私塾の経営や教導職（中講義）として、僧侶に止まらず一般の人々を相手に教育活動を行った晩年までの蔵書（農業、暦、教科書など）に二分される。鈴木知周の蔵書は、まさに時代の転換点に生きた僧侶、知識人の「知の変動」を窺う格好のモデルなのである。江戸時代の蔵書、明治時代の蔵書は、それぞれ宝聚院、佛法紹隆寺の同時代の蔵書と対応する部分も多い。

なお、蔵書の分析を行う際には、典籍の質や量を問題とはしないことを付言しておきたい。重要なのは、「不  
断に収集される典籍群が、既存の典籍群と結合・断絶を繰り返しながら、どのような「知の体系」を生み出していくのか」なのであり、分析に「特別な典籍」や「大量の典籍」は必要ないのである（一方で「無駄な典籍」も存在しない）。したがって、大寺院と小寺院、都と地方といった枠組みも有効ではなくなる。分析された結果

は、広くそれぞれの時代の寺院における「知の体系」として一般化し得るからである。蔵書の山から「宝探し」をする必要はないのである。

### 三 読書史への視座

寺院資料調査の研究が、蔵書の形成が不断に、かつ変容しながら行われること、すなわち「知の体系」の通時の変遷を明らかにすることを目的とするならば、現行の文学研究の方法―時代別、ジャンル別―では対応できないことになる。

また、典籍それぞれを等質（価値）のものとして認識し、体系化していく作業も、決して容易ではないだろう。それでは、いったいどのような視座をもって、研究に向き合えばよいのだろうか。

一つの提案としては、「読書史」を見据えた研究を推し進めていくことだろう。そもそも日本文学研究自体が抱える問題でもあるが、作品を研究する際、作品の基底には常に作者が意識されており、作者未詳の場合でも、作品を統合・支配する擬似的な作者（「語り手」など）が想定されている。「作者」を意識して蔵書を見れば、どうしても典籍を等質のものとして見ることは難しくな

る。聞いたことのない僧侶の作品よりも弘法大師や法然の作品の方が「良く」見えてしまうからである。しかし——実際にそうでもあるのだが——寺院の蔵書は「読む」ために収集されているのだから、常に「読者」を意識して研究にアプローチすれば良いのである。時代が変われば「読書」の嗜好も変わるのは当然である。

「読書史」に鑑みれば、寺院以外にも、大名文庫、藩文庫、和歌の家、名主家など、固有の読書環境のなかで典籍が収集されてきた（読まれてきた）蔵書群が存在する。今後は、幾多の読書環境のなかで不断に変容していく「知の体系」を並立させ組み合わせるべく、通時的・体系的な文学研究を模索していくことが必要だろう。

#### 四 シンポジウムの構成

本シンポジウムは、まず、先行する寺院資料調査の研究成果を踏まえ、宝聚院の蔵書の通時的分析を通して、寺院資料調査の問題共有と課題展望を図る。担当は原克昭である。

次に、調査をした四箇寺のいづれにも確認できるにも関わらず、中世の寺院資料調査では注目されてこなかった「近世」「漢籍」の受容について、如来寺の蔵書を用

いながら考察する（寺院資料調査に早く入った歴史研究者たちが「書籍」を残し、後に入った文学研究者たちが「漢籍」を残していったのである）。担当は門屋温である。

最後に、鈴木知周の蔵書の考察を通して、やはり、今まで注目されてこなかった、「近世」から「近代」にいたる知の変遷を追う。近世の蔵書を目黒将史が、近代以後の蔵書を河内聡子が担当する。

#### 注

(1) 『中世文学研究は日本文化を解明できるか—中世文学会創設五十周年シンポジウム—中世文学研究の過去・現在・未来』の記録—（中世文学会・笠間書院・二〇〇六年十月）

(2) 拙稿「地域寺院と資料学」（前掲注1研究書所収）

(3) 『総本山善通寺 聖教・典籍目録稿』（国文学研究資料館・二〇一〇年三月）、落合博志「善通寺の聖教とその形成」（『小野随心院所蔵の文献・図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその展開』Vol. III・荒木浩他・二〇〇七年三月）、同「善通寺の聖教と説話資料・文学資料」（説話文学会一四一回例会シンポジウム「善通寺の経典・聖教」、『説話文学研究』44・二

〇〇九年七月)、松原潔「普通寺の歴史と宝物」(同)、中山一磨「普通寺藏『真友抄』について——南北朝期高山寺系聞書が映す世相」(同)、拙稿「よじり不動考」(同)

(4) 寺院の蔵書か、個人の蔵書(私物)かの判断は、蔵書印の有無によった。宝聚院は「宝聚院」(江戸時代後期)「隆榮執事印」(大正二年)など、佛法紹隆寺は「宥瑞」「佛法紹隆寺什物印」(江戸時代後期)など、如来寺は「堅東」(江戸時代後期)「鈴木知周藏本」(明治時代)などの蔵書印が確認できる。

(5) 現在、書誌情報の見直し作業を行っている。

(6) 江戸時代に書写・校合された典籍の多くは、帯止めされたまま使用された形跡がない。真言諸流派の「聖典収集」事業としての蔵書形成がなされたことが窺えるだろう。

(信州大学教授)